

# 単刀直入

## 信仰の山、富士山の整備

都留文科大教授 渡辺 豊博さん(62)

### 「廃屋」も評価して復元を

—世界文化遺産登録をめざす富士山で、吉田口登山道

のふもとから5合目までの廃屋をどうすべきかが問題になっています。

信仰の山としては全体が構成資産になる。そう考えると廃屋を悲惨な状態のままにしておくことが、まず信じられないです。何度もこの登山道を登りましたが、この5合目までの道は最高です。森の中を通り、木のすき間から山頂が見えるチラリズムがある。森を突き抜けて5合目までゆくと、丸裸の富士山がどーんと立ちはだかる。富士山を見ながら登ること自体が、富士山信仰のスタイル。建物は、その拠点として重要です。

—すでに富士吉田市でも遺跡調査をし、十分、重要性は認識されています。それは承知しています。だが、どう保全し、どう伝えていこうとしているのか、まったく見えません。もっと議論を広げて信仰の山の富士の意味や意義は何なのか、何を後世に残したいのかを考えるべきです。

—現在、ふもとからの登山者はほんの一部。多くは有料道路の富士スバルライン

を利用して5合目まで車で行く。森の中を通って宗教性を高め、いく修行程のプロセスが崩れてしまっている。山としての宗教性を国民に学んでもらおうとするなら、復元しないとまやかしの遺産になってしまうのではないですか。

—とはいえ、個人所有の建物も多いです。個人で再建し、維持管理するのは現実的に厳しいのでは。信仰の山として、かつて多くの人が登った吉田口は「本道」です。そこを整備しなくとも、世界文化遺産としての意味はわからないのではないのでしょうか。国や地元行政など、すべてが一体となって再生プランを先につくるべきです。そのうえで資金的な問題や採算性、法的な問題、誰が主体となるのかなどを議論すべきです。イコモス(国際記念物遺跡会議)の調査で、こうした現状がどう指摘されるか。それが心配です。

—廃屋は景観や登山者への安全の面から撤去した方が良く指摘もされます。今ある廃屋も富士山の文化的価値の証拠として、意味があるものだと思います。世界文化遺産をめざすというのであれば、すぐには言いませんが、いずれは建て直すという意思を持ち、危険性を考慮し、学術的評価もしたうえで、復元してゆべきです。

—すべてを再生することは理想的だと思いますが、現実的ではありません。世界の宝物にしようとしているんです。地元の市町村や日本だけの宝ではなくなりませぬ。まず、国の問題として議論することが先ではないでしょうか。安全確保のための整備は、当然必要になります。なおかつ、かつての登山道の雰囲気も残さなくてはいいけません。

高度成長があり、5合目まで車で行けるようになったことが、宗教の山から観光の山に切り替わってしまった転換点でしょう。文化遺産に登録されれば、世界中から専門家も含めて多くの人が訪れます。目先の問題だけではなく、長期的な視野で考える必要があります。

わたなべ・とよひろ 1950年、秋田県生まれ。東京農工大農学部卒。73年に静岡県庁に入り、農業基盤整備事業の計画実施などを担当した。2007年に東京農工大大学院連合農学研究科で農学博士号を取得。08年から都留文科大文学部社会科学科教授として市民活動論や富士山学を教える。



### 「見て見ぬふり」責任は

足を使った富士登山は、今では5合目から始めるのが当たり前。富士スバルラインの開通で廃れた登山道に残る廃屋は、世界文化遺産の登録をめぐり、何度も話題に上ってきてはいた。天気の良い日には、ふもとから5合目までの登山はとても気持ちが良い。渡辺教授のいう「最高の登山道」に違いない。ただ、そこで目に入る廃屋が気になるのも事実だ。歴史的価値もある。所有者にとっても代々受け継いできたものを手放すことも、費用をかけ撤去することも簡単ではない。すべてを修復・再建し、保存するのが理想ではあるが、自主的に進めるのは難しい。残念なことに、この問題が専門家を交えた「長期的な視野」を持って議論されてきたとはいえない。保存するのか、撤去するのか、両論ある。イコモスの現地調査を今夏にも控え、地元の富士吉田市が批判の矢面に立たされている。だが、国や県、所有者らに責任はないのだろうか。「見て見ぬふり」をしてきたのは市だけではないはずだ。(菊地雅敏)

取材を終えて